

## 第二十回香川菊池寛賞受賞作品

傷痕 しやうこん

帰来広三 きらいこうぞう

Y新聞大阪本社の社会部は、ビルの上階にある。御堂筋の銀杏並木がいつぱいに見える。鮮やかな緑色は、疲れたときの目を和ませてくれるが、今は秋を急がせるように黄ばみ始めている。

やがて目もくらむような黄金の吹雪を見せってくれるだろう。そして散り敷く間もなく、疾駆する自動車群の車輪に踏みにじられ消えていくのだ。

——生家の銀杏はもう散る頃だな——

煙草を吸いながら、福森裕はぼんやりと目を銀杏並木に投げかけていた。

「おい、福ちゃん、原稿はすんだのかい。だつたらちよいと頼まれてくれんかな」

と、キャップの萩本が声をかけてきた。

「はあ、なんででしょうか」

煙草をもみ消して、福森はキャップの机の前に行った。

萩本は大学の先輩でもあり、入社以来目をかけてくれM支局にいた福森を本社に呼び出し、現在の社会部戦争班の一員に加えてくれたのである。

「今な、受付けに鳥取の山奥から来た人が戦争班の記者に会いたい、と云うとるそうじゃ。頼むよ」

「戦争」欄はもう八年近くも続いている。戦後三十年を過ぎた頃、第一次石油ショックも薄らぎ、ひたすら高度成長を目指して日本は進んでいた。同じアジアなのにベトナムでは血みどろの戦争がいつ果てるともなく続けられていたのだが、日本は平和であった。かつてなく長い平和が続いていた。そしてこの平和が当り前のことだと思ふ人が日々増えていたのも、ある意味では無理はなかった。戦争体験はも早や風化したようにも見えた。しかしそれは錯覚であった。読者欄の投稿には、戦争への危機感を訴えるものが増え、日本の進路を憂うる文章が後を絶たなかった。人間が繰り返す戦争という愚かしい行為に、噴きあがるような憤りがそこに

は溢れていた。二度と戦争を起こしてはならない、という論理やイデオロギーを超えた情念を大切にし、そう思う人を一人でも多くするのが新聞の責務でもあった。

それには戦争の体験者や犠牲者に赤裸々に語ってもらい、当時を紙上に再現するのが一番いい方法であった。

掲載を始めると驚くほどの反響があった。戦後十年も経たない頃に、も早や戦後は終わったといった大臣がいたそうだが、とんでもないことであった。戦争の傷痕は想像以上に深く消えることはなかった。

福森が入社した昭和五十二年から「戦争」欄は始まり、足かけ六年のロングランとなりなお終りは見えていない。地方支局に在任中も読者の関心の高さを痛いほど感じ

させられたものである。昭和二十九年生まれの福森であったが、戦争というものの概念的知識は自然と身につき、「戦争」班員となっても途惑うことは少なかった。この一年間に数え切れないほどの人と会い、そして話を聞いてきたことか。

受け付けで教えられた二号応接室のドアをノックして福森は部屋にはいった。

直立した一人の老人が、真つすぐ福森を見つめた後深々と一礼した。短かく刈り込んだ頭髪は純白に近く、瘠身そうしんであった。上質な生地じしの洋服を着ていたが、どことなくだぶつき身についていない。頬がそげて顔色は蒼ぐるく、目はやや黄色みを帯びている。

交換した名刺には、澤田建設株式会社

代表取締役 澤田卓也とあり、住所は鳥取県日野郡日北町となっていた。

「福森さん、突然に参りまして申しわけありません。私は戦争中海軍の航空兵でしたが、当時の上官を戦後ずうつと探しているのですが、どうしてもわからないのです。万策つきたあげく、藁わらにも縋すがる気持でここへ来ました。勝手なことですが私にはもう残された日が少ないものですからお許し下さい」

「はい。できる限りのお手伝いはさせてもらいますが、ま、どうぞおかけ下さい」

深々と肘掛け椅子に腰を沈めた澤田氏は、ホツとしたように長い息を吐き出した。

「澤田さん、今言われた日が少ないとはどういう意味ですか」

「はあ、それは……」

澤田氏はいい淀んだが、何かを振り切るような声で、

「正直にいいます。私は今癌に侵されています。あと半年か長くて一年足らずの寿命なのです」

福森は返す言葉が見つからず、まじまじと澤田氏の顔を見詰めていた。

「いや、驚かないで下さい。死ぬことは平気なのです。戦死した戦友にくらべると、ずい分長生きさせてもらったのですから――」

といいながらにつこりと笑った。

「でも、それは医者が宣告したのですか、本人のあなたに？」

「いや、そうではありません。頑健がんけんな体を

資本にして今まで働いてきたのですが、今年の春頃から体調が思わしくないので、初めて医者に診てもらいました。私には単なる胃潰瘍だと医者はいいましたが、家内には手のつけようがない癌だと言ったそうです。長年連れ添った夫婦ですから、どんなに隠してもわかるのですよ。半年とか一年というのも私が問い詰めると、家内はただ黙って涙を流したので諒解りようかいしたのです」  
慰めようと思っても、白々しい言葉は無意味だった。

「福森さん、病気のことはどうでもええのです。ところで、あなたはお若いですが昔の海軍のことはおわかりですか」

「はい、知識としては十分ではありませんが何かと必要に迫られて勉強しました」

「さすが新聞記者ですね。それではお話し  
ますが、おわかりにならない所やご質問が  
ありましたらご遠慮なくどうぞ」

福森は黙ってうなずいた。澤田氏の言葉  
から受けたショックの余韻が徐々に消え去  
ろうとしていた。

おおがたひこうていそうじゅう  
大型飛行艇操縦の実習教育を終えた澤田  
ひちょうが、みなみたいわん  
飛長が、南台湾の東港基地に駐在する  
きゅうまるいちこうくうたい  
九〇一航空隊に配属されたのは昭和一九年  
四月初旬であつた。

きゅうまるいちこう  
九〇一空は前年の十二月に新設された航  
空隊で、海上輸送の直衛と対潜水艦哨戒が  
しゅにんむ  
主任務であつた。使用機は九七式飛行艇で、  
さわだひちょう  
澤田飛長が着任当時十二機が可動していた。  
きゅうななだいてい  
九七大艇はすでに旧式化し、第一線機は

新税の二式大艇にしきだいていに変わっていたが、戦局の  
逼迫ひっぱくは九七大艇きゅうななだいていをも戦力として重要視され  
ていたのである。巡航速度二六〇キロメー  
トルの鈍足であつても、一度跳びあがれば  
二十時間乃至二十三時間も飛び続け、六千  
キロの長大距離を飛翔する能力は抜群の行  
動性を誇つてもいた。

乗組員は機長、操縦二名、偵察二名、電  
信二名、搭乗整備二名、電探二名の計十一  
名で構成され、十五組じゅうごくるが交互に出動してい  
た。

もうその頃の日本軍は押されつ放しで、  
海も空も米軍に制圧されており、ただでさ  
え鈍足、且つ翼幅四十米の大艇だいていは発見され  
易く、その上防御が弱かつたから被害は甚  
大であつた。

澤田飛長は中山機長のペアと決まり、先任下士官でもある柏村主操縦員に伴われ、ガンルーム（士官次室）の中山中尉の所へ申告に行った。

「おうー、澤田飛長か、よく来てくれた。万事は柏村兵曹に任せてある。出撃も近いからゆっくり休養をしておけ。それから柏村上飛曹、帰りに主計科に寄って俺の名前で酒を二本持って帰り、澤田の歓迎会をしてやってくれ。俺もちよつと顔を出すからー」

戦場を駆け巡って来た士官にしては、態度にも言葉には全く鋭さがなく、ゆったりとした雰囲気を漂わせている機長であった。

——この機長と一緒になら平気で死ぬるかも知れんな——。

目、鼻、口すべてが大振りで、ちよつと眉毛が八の字形に開いているのが何ともいえず親しみを感じさせる。

一週間もすると、中山機のペアとも打ち解け、緊張感もほぐれてくる。何と云っても澤田は最若年の搭乗員だから学ぶことも際限なくある。ペアの一人ひとりの人柄が呑み込めてみると、全部に共通したある事に気づいた。それは全員がこせこせしたところを持たず、作業は手早く失敗がないのである。その上制裁がなかった。予科練時代から精神棒を食わない日の一日としてなかつた澤田にとって、殴られもしないここは天国であった。

だが他のクルーでは毎晩のように制裁が続き、地獄絵さながらの修羅場が演じられ

ていた。基地の普通科分隊もそれは同じだったし、士官の間でも、時として兵学校出が予備学生出身の士官を制裁することも見受けられた。

「澤田よ、ありやあなあ、江田島出でなけりやあ士官でないように思ってる奴の驕りと焦りなんだよ。ばかばかしい」

「噛んで吐き出すように柏村上飛曹はいう。江田島を出た士官だからといって、飛行時間二百時間もあるなしの技倆しかなかった。階級が下の予備士官や俺たち下士官搭乗員が遥かに腕は勝っているさ。だがなあ、士官はそういう兵隊を指揮するような教育を受けたはずだよ。指揮官としての人格、魅力のある識見を持たなきやあ部下は従って来んよ」

「はい、なんだか判るような気がします」  
「殴った奴と殴られた奴が、死ぬときやあ笑って一緒だ、なんて俺にはできないし、そんなこと信じられやしないってことだよ」

大艇は十一名、少ないときでも九名が、運命を共有するのである。一人として信頼を欠けば暗黒の世界へ堕ちて行くのだ。

「その点お前は幸運だったぞ、まあ追々わかるだろうが、俺は中山機のペアが海軍一だと自負しとる。機長は予備士官だがソロモンの激戦を生き抜いて来ている強者だし、何ととっても人間が大きいよ。機長と一緒になら何も怖いことはありません」  
歓迎会に顔を出した中山中尉は、持参したウイスキーを皆に注ぎながら、

「おう、みんな澤田をよろしく頼むぞ」

と頭を下げた。きゅーんと胸が締めつけられ、熱いものがこみ上げたのを澤田はぐつと呑みこんだ。

「分隊長（地上では准士官・少・中尉）はどこ出身でありますか」

と副搭乗整備員の牧野二整曹が聞いた。

「俺は満州だよ。満州生まれの満州育ちだよ。よくこの顔をみる、日本人に見えんだろう。

あ、は、は」

「それにしても名前が善右衛門とはこれ如何に」

と主偵察員の辻一飛曹が茶化した。

「前途、ええもんと読めばええんじゃ」

柏村上飛曹の頓知にドツと湧いた。

人間の大きさ、と柏村上飛曹はいつたが、

茫洋とした中山中尉の風貌や、物事にこだわらない大らかさは、どんな人間をも包みこんでしまいいそうであった。

フィリピン西方海域の哨戒飛行が下命され中山組が攻撃する日が来た。澤田にとっては初陣であった。指揮所で飛行長の命令を受け、乗艇、それぞれの配置についた。

「操縦員配置よろし」

「おう」

「偵察員配置よろし」

「おう」

きびきびとした報告に対して、中山機長は牛の啼くような声で応える。

出発前の静寂が訪れた。ピーンと張り詰めた緊張感が艇の隅々にまで通う。そのとき、中山機長が指揮官席から操縦席に声を



かけた。

「なあ、柏村兵曹かしむらへいそう、今日は操縦を澤田飛長さわだひちようにやらせて見よう。主、副交代だ。いいだろう」

「はい。わかりました。交代します」

「澤田飛長さわだひちよう、わかったか」

そんな無茶な、といおうとしたが、辛かろうじて澤田は声を呑みこんだ。実用教育を終えたといっても初陣である。全員の生死を預る操縦を任せられる自信は零ゼロに等しい。

右席みぎせきの柏村主操縦員かしむらしゅそうじゆういんに助けを求めようとしたとき、離水合図りすいあいずのブザーが鳴った。

ままよ、と無我夢中で頭上の四つのスロットルを握り、ぐいと前方へ一杯押し出した。エンジン全回転、湖上に浮かぶ船のように巨大な飛行艇ひこうていが身震いをしながら滑り

出した。スピードが増し、波しぶきが後に飛ぶ。ともすれば艇首ていしゆが上がるうとするのを、操縦桿そうじゆうかんを一杯前に倒して押さえる。やがて飛行艇ひこうていは次第に浮き身になり、艇底ていだいに水の抵抗を感じてくる。艇首ていしゆがのめるように下がるのを待って、澤田は静かに操縦桿そうじゆうかんを手前に引いた。速力一二〇キロとなつたのを見て掬すくいあげるように操縦桿そうじゆうかんを操り艇ていを浮上させた。〇五〇〇、熱帯の夜はもう姿を消していた。

「進路一六八度！」

偵察席ていさつせきから指示がくる。よーそろと復唱しつつ指定コースに艇ていを乗せ、ほっとして右席みぎせきの柏村主操縦員かしむらしゅそうじゆういんを見ると、何気ない動作で額の汗をふいている。指揮官席を振り返ると中山機長は両腕を組み、眠ったよう

に目を閉じていた。

飛行艇ひこうていの任務は地味な役廻りで、戦闘機や攻撃機のような華々しさは少しもない。敵を発見して彼らに知らせると舞台を引くのである。二十時間も長時間を緊張し続ける忍耐力は、常人のなし得ることではない。澤田を除く全ペアは、少ない者で千時間、機長などは五千時間を越える飛行記録を持っていた。戦場に於ては超人的な精神と体力、そして強運の持ち主でもあった。

——この機長の組クルーにいる限り簡単には墜とされたりしないだろうし、きっと生き抜けるような気がする——

自信が湧いていき、操縦桿そうじゅうかんを握る手に余裕が生まれた。組クルーに同化し一体となった充実感に澤田は満たされた。澤田に操縦を任せ

たのは、機長始め先輩搭乗員が、戦場という舞台へ初登場する澤田のために演出してくれた花道だったのだ。

——なら、与えられた役を命の限り演じ続けることだ——

出撃の度に澤田は成長していった。五月には二等飛行兵曹にとうひこうへいそうに進級し名実ともに一人前の搭乗員となった。

九月、中山機はただ一機ふっじん仏印のカムラン湾の基地へ進出。北は海南島かいなんとうさんやこう三亜港から、南はマレー半島ほんとうなんたん南端のシンガポールまでの南支那海みなみしなかい、ボルネオ海に連なる仏印沿岸ふっじんえんがんの帯を、九三六空の水偵すいてい、水戦すいせんなどとともに海上護衛戦に従事、昼夜を分わかたぬ出撃を続けた。

二十年一月、東港基地とうこうきちの九〇一空きゅうまるいちこうへ帰還。

たった四か月に満たぬ期間だったが、帰  
つてみると、隊の様相ようそうは一変していた。十  
二機の大艇だいていが三機に減って、いやに基地が  
広く感じられ、搭乗員も大半が新顔であっ  
た。

硫黄島いおうじま、台湾沖たいわんおき、比島沖ひとうおき、ルソン島等航

空戦の前後に大艇だいていの被害が多かったのも、  
索敵哨戒さくてきしょうかいの任務上止むを得ぬことではあつ  
た。しかし九機百余名の命が、知らぬ間に  
海に消えていったのである。機上戦死、負  
傷者を合わせると、百三十名近くを失って  
いた。

「ひでえなあ、寒けがすらあ」

「基地の奴ら、俺たちが幽霊に見えてんじ  
やねえか」

「なあに、悪運強いつてえのは俺たちのこ

とさ」

「馬鹿いえ、明日のことはわかりやしねえ」  
兵舎に落ちついたものの、中山機のペア  
は寝つかれなかった。だが司令部も苦慮を  
していた。虎の子となった三機の大艇だいていを、  
みすみす撃墜されるとわかつている空域へ  
飛ばすことはできず、さりとて温存してい  
ては文字通り空中の楼阁ろうかくに等しく、引いて  
は隊の存在すら危ぶまれるのが必定ひつじょうであつ  
た。

二月三日、米軍はマニラ市内に突入した。

陸・海軍の航空隊は神風攻撃かみかぜこうげきを米艦船べいかんせんに繰  
り返し、日一日と消耗していったが、その  
中には故障による不時着者もいた。また通  
常攻撃隊員の被撃墜機ひげきついきの生存者や爆撃によ  
り飛行機を爆破され、飛ぶことのできなく

なったパイロットなどが多数残され、彼等は馴れぬ陸戦の銃を持って戦っていた。

搭乗員の養成には、相当の訓練と月日を要し、莫大な燃料も消費するので、当時もう新搭乗員の練成は取り止めになっていた。従って前線に取り残された熟練者を救出し、再度戦力として活用する計画が採用されることに決まり、命令が九〇一空きゆうまるいちくうに下命かめいされた。

搭乗員たちは緊急電報によって、マニラ湾のキャビテの基地に集められた。決行日が七日夜と発表され、組クルーは帰隊したばかりの中山組が使命された。

「やれやれ、貧乏くじを引いたなあ」

「年貢の納めどき、ってわけよ」

「他の組はほっとしてるぜ」

「ひがむな、ひがむな、俺たちでなけりやあできねえ仕事よ」

「分隊士ぶんたいしと一緒になら大丈夫だよ。前途ええもんだからな」

「同感！願掛け不動さんといくかあ」

澤田たちはくったくのない冗談をいながら、並大ていの飛行でないことをお互に自覚していた。

隠密裡おんみつりに闇を利用するのだが、敵のレーダー網は優秀で、夜間戦闘機も多い。海上には艦船団かんせんだんがうじゃうじゃといて、蜂はちのはい出る余地もない警戒態勢を敷いている。

「墓場への急行」とか「靖国への出発」などと搭乗員が決めつけていたのも自然の成行きであった。

出発時刻一時間前の夕暮れ、乗員たちは

それぞれの配置個所の点検を終った。操縦席から振り返った澤田は、誰もいないのを確かめるともう一度計器類に目を移した。

暖気運転中のエンジン計器の針がかすかに揺れながら一点を指している。隣席の主操縦席に、交代の整備兵が来て無言ですわった。澤田と顔を合わせても目をそらせる。態度もぎこちなく腫物にさわるような気持ちがありありと見える。

——この野郎、俺たちが死ぬもんと決めてやがる、なんだ！その目は！——  
よっぽどとなりつけたいのを、ぐっと押しとどめた。澤田の気配を察したのか整備兵はそそくさと席を離れた。

やり場のないうっ憤をどうしようもなく、澤田は右腕を上げて一番エンジンのスロット

トルを押しして廻転をあげた。瞬間的に元の位置に戻したが、バランスを崩した大艇はぐらりと揺れた。そのとき胴体に何かがあったような感触があったが、それきりなので澤田は気にもとめず、指揮所へ行こうとして腰をあげた。

夕闇が広い基地を支配しようとするのを、拒否するように探照灯がともされ、蒼白な光芒が大艇をとらえた。操縦席も昼をあざむく明るさになった。眩しさに馴れて窓外を見ると、多勢の基地員が澤田の艇を目標に駆けて来る。何があったのか、といふかしみながら窓を開けて顔をのぞかせた。一人の整備員が澤田に向かって盛んに両手を交差させてエンジンストップの信号を送っていた。素早くエンジンのスイッチを切

り、再び窓から身をのり出して澤田は叫んだ。

「何だ！何があったのだあ」

しかし誰も答えず、翼を支える支柱棒の胴体付根附近に、何かを囲むような輪ができていた。担架を持って走って来るのが見えた。

「事故だ！」

澤田は後部へ走り、ハッチを開けて外に出た。病院へ向う担架を囲み、口々に負傷者を励ましている声が聞えた。

「しっかりとして下さい！分隊長」

「中山！中山！しっかりとしろ」

エンジンの爆音の途絶えた基地の夕風に乘ったその声は、澤田の耳に突きささり、したたかに澤田を打ちのめした。

——どうして、どうして機長が——

夢中で人を掻きわけて担架に近づいた。

血の気の引いた中山中尉の顔は、一切の表情をなくし周囲の喧騒けんそうとは無縁のように見えた。右腕の肘ひじ上部から下がなくなり、止血の布を伝わった血がぽたぽたと地上に滴っていた。

茫然としている澤田を押しつけて、四、五人の士官が担架を取り囲んだ。

「何というざまだ！」

「予備学生出はこれだから処置ねえんだ。片輪になっても生命が惜しいのかッ！」

「何だ、気を失っているのか、だらしのねえ」

澤田は一瞬体中が氷のように冷えきった。

——これがエリート士官なのか、人間性も

武士道も何一つ理解できない奴らに、戦争がわかってたまるか！――

許せん！澤田の血は逆流し、白熱のたぎるような怒りが噴きあげ、こぶしを固めて飛びかかろうとした。

「待て！」

声とともに後から羽交はがじめにされ、ずるずると人の輪の外へ引き出された。もがいても手はゆるまず、強力であつた。あ、柏村上飛曹かしむらじょうひそう、と気づいた途端澤田の戦意はなえた。

「澤田よ、いいたい奴にはいわせて置け。彼らはい最近に來たばかりで、中山中尉を知らんし、戦争も知らんだよ。やがてわかる時が来るさ。もつともわからんうちに死ぬことだつて有り得ることだ。俺は中

山中尉を信じているよ、単なる事故であると――、おや、お前まだ怒ってるのか？顔が

真つ赤じゃねえか」

澤田は笑おうとしたが、顔が引きつり、柏村上飛曹かしむらじょうひそうの顔が波打つてぼやけた。

マラリヤの発熱であつた。

高熱との闘いが十日間も続いた後ようやく正常な意識をとり戻したが体力の回復にも同じくらしいの日数を要した。入院中、山中尉や柏村上飛曹かしむらじょうひそうらのペアのことを看護兵に聞いたが、口を濁して語りたがらなかつた。

「何かあつた」

と覚悟をしてはいたものの、搭乗員室に帰って聞かされた話はあまりにも冷酷であつた。

中山中尉は右腕を失ったが生命に別条はなく、査問会の後、日本内地の海軍病院へ移される予定になっていた。ところがエリート士官たちは、中山中尉の病室へ、見舞いといつて押しかけ再びなじったという。

偶然の事故ではなく、故意に腕をペラに入れたのだろう、といわんばかりであった。そうだ。中山中尉はただ、私の過失でした、といっただけで、何も弁解しなかったそうである。

いやがらせは士官たちだけでなく、下士官搭乗員の中にも、同調する者がいて、それらは病室の外から、「卑怯もの」「海軍の面よごし」等どなったあげく、小石を投げたそうだ。

見兼ねた軍医が面会停止の処置をとり、

病室の外にも衛兵を立て、誰も近づけないように監視させた。

中山中尉が入院して三日後、エリート士官を機長とした大艇が、フィリピンのキャビテ湾へ向けて、搭乗員救出飛行に出発した。ペアは中山機の乗員で、中山中尉と澤田を除いた全員であった。そして約三時間後、バシー海峡南方洋上で、「セ・セセ」(敵戦闘機)を発信したまま連絡は絶えた。おそらく敵の夜間戦闘機の餌食にされたのであろう。「中山機のペアは海軍一だ」と誇らしげに語った柏村上飛曹、射撃にかけては天才的技術ぎりようを持つていた辻一飛曹、冗談ばかりいっていた笹木上飛曹等の九人の搭乗員たちは、遂に暗黒の海へ消えていった。

翌日の深夜、病棟の空室で、中山中尉が



割腹しようとして短刀を腹に突立てた。利き腕を失っている中山中尉は、不馴れな左手だったため、突きがやや浅く、横へ引き廻わそうとしたとき、出血多量で意識を失ったらしい。

そのままであれば死ぬこともできたのであろうが、看護兵に発見されて一命を取りとめたという。そして一週間後、要務飛行の大艇だいていに便乗して佐世保海軍病院させほかいぐんびょういんへ移送されていった。

澤田は一人になった。死ぬときは一緒だ、と思いきりでいたのに、運命の神は皮肉であった。だがいずれは俺も後を追うことになるのだ、と自分にいいきかせるのだった。

病後を考慮したのか搭乗割りはいつも予備スペアの配置になり、出撃回数はぐんと減つ

た。ある日、出撃のための整備をしている大艇だいていの横を通っていた澤田は、ある事実を目撃してがく然となった。

一人の整備員がA型の支柱（翼を支えるもの）附近の張線ちようせんを調べていたが、突然強い横風が吹いて艇ていがぐらりと揺れた。整備員は足元をすくわれ落ちそうになったが、反射的に両手で張線ちようせんをつかみ、事なきを得た。

もし、張線ちようせんをつかみ損ねたら落ちただろうが、その途中でプロペラの廻転かいてん圈内にはいれば瞬時に命を失うことになる。

澤田の脳裡のうりに中山中尉の事故が蘇った。あのとき、中山中尉は張線ちようせんや方向探知器用のアンテナを調べていたのに違いない。そして気まぐれのようにエンジンの廻転をあ

げた澤田の行為によって、バランスを失い落ちたのだ。そして右手がプロペラの廻転圏内にはいったのである。そう推理したとき、澤田は艇体ていたいに何かが当たったような感触を、まざまざと思い出していた。

事故の元凶は自分であったのだ。うかつであった。中山中尉はすべてを知っていて、澤田を庇ってくれたのではないだろうか。いても立ってもおれない悔恨かいこんに責められ、その夜はまんじりともせず朝を迎えた。

あの事故が起きなかったら、九人の戦友も死ななかつたに違いない、と思うと胸が張りさけそうになり、毛布をひっかぶっては慟哭どうこくするのだった。

死にたい、と願っても会敵かいてきの機会きかいは得られず、いっそ特攻隊へと思っても大艇乗組だいてい

員は受け付けを拒否せられ、澤田の懊悩おうのうは深まる一方だった。

四月初め、残っていた九七大艇きゅうななだいていとともに瀬戸内海にある詫間基地たぐまきちの八〇一空はちまるいちくうへ転勤になった。艦載機かんさいきの空襲で九七大艇きゅうななだいていが炎上した後は、二式大艇にしきだいていの搭乗員たかじやういんとなり、索敵さくてき、哨戒しょうがいに幾度となく出撃、その度に死地を得ようとしたが不思議に生還し、不死身の卓たくさん”と呼ばれるようになった。敗戦までの六か月間に、大艇だいてい二十七機、三百名近い搭乗員が失われたのだから、生き残れたのは奇蹟としかいいようがなかった。

戦争が終つても、澤田に喜びはなかった。死に損ぞこなった自分が情なさけなかつた。中山中尉や戦死した九人の組ぐりに申しわけない気持ちでいっぱいだった。二十一歳の夏であった。

中国山脈の中にある故郷は、昔ながらのたたずまいを見せて静かであった。その静かさが澤田にはたまらなかった。鳥の囀りさえずを聞いていてもいつの間にか、中山機の組クルーの声になる。溪川たにかわのせせらぎが爆音に変わり、風の音は戦場の空につながった。

澤田が土木工事の人夫にんぶになったのは、翌年の春であった。力いっぱい働いておれば、その間だけでも中山機の組クルーのことを忘れられそうに思えたのである。

がむしやらに働いた。自分の体をいじめ抜いた。損得などは眼中になかった。五年後に隣村の娘と結婚し、翌年には独立した。田舎娘とばかり思っていた妻であったが、意外に計数けいすうに明るく、世事せじに長けていた。澤田は乗り気になれなかったが、何度も妻

にすすめられると、終いにはめんどろくさくなり、すべてを妻の宰領さいりょうにまかせた。

澤田は働くだけで、経理面にはいっさいタッチしなかったが、いつの間にか株式会社になり、社員や使用人が増えて、昭和四十年代になると近郷きんごうでは大手の建設会社になつていた。社長に祭り上げられてみると、現場へ行って作業員と一緒に土盛りなどはできなくなった。机を前にして据すわっているのは苦痛でもあり退屈そのものであった。

「ゴルフをやってみなさいよ」と妻にすすめられたことがある。

「ばかもん、あんな子どもの遊びなどやるか。アメリカ人やイギリス人の真似など大嫌いじゃ。死んだ戦友に顔向けできんよ。うなことは金輪際こんりんざいせん！」

生きていられるだけでいい。ぜい沢だなあ、かりますよ」

と思うときはきまってるんだ戦友に対して、と陸軍の軍人だった者に教えられ、澤田「すまんなあ」と詫びる澤田であった。

その頃から澤田は中山機全員の出身地を探し出すことに熱中し始めた。戦争当時は、勿頸ふんけいの戦友であっても△県出身とか○市出身と知る程度であり、それ以上知る必要はなかったからである。

復員後の澤田は、同期の戦友とも没交渉であったから、どこへ行って聞けばいいのか五里霧中であった。戦友会なるものが数多くあっても、それらは比較的軍歴の浅い者や生存者の多い隊などであって、九〇きゅうまるいちくう一空のように戦死者の多い隊の会はなかった。

「社長、そりゃあ県庁の福祉課へ行けばわ

は県庁へとんで行った。

「お気の毒ですが、ここには陸軍関係だけしかありません。それも当県出身者のみです。海軍は厚生省の援護局業務第二課へ問いあわせて下さい」

はやる心を押さえて、戦友たちの名前、階級、部隊名、戦死年月日等を書き、依頼書とともに送った。

返事が来るまでの二か月間を澤田は千秋せんしゅうの思いで待った。ようやく手にした書面には、忘れられない戦友の本籍が並んでいた。北海道、東北、関東、四国、九州、と全国に散在していたが、中山中尉の欄は、樺太とのみ書かれ以下は空白であった。

添え書があり、戦死者の場合は、遺族年金を受給している、またはしていた筈だから、恩給局援護課、もしくは各県の遺族会に問いあわせれば、現住所が判明するのではなからうか。と示唆しさされていた。

中山中尉は生存者ではあるが、右腕を失っているから傷痕軍人しょういぐんじんとして当然恩給をもっている、と澤田は推定し、こちらも合わせて援護課に照会した。

最年長であった主搭乗整備員しゅたつじょうせいびいんの山下上飛曹やましたじょうひそうのみが妻帯者で、遺族は本籍地と違う住所になっていた。他は町名変更になっただけだが本籍地にそれぞれ遺族がいた。しかし途中で受給停止になっている者もいて、それは両親とも亡くなっていることを物語っていた。

中山中尉の方は、恩給名簿になく、従って住所は不明であった。亡くなっていると思いたくなかった。きっと探し出せる、と澤田は信じていた。

それから毎年、戦友の墓参りを始めた。一度に全部は無理だから、一回に一人、もしくは二人にしたので、七年の歳月を要したのだった。長い鎮魂の旅ではあったが、充実した七年間でもあった。

小川のほとり、海の見える丘、落葉松林からまつばやしの中、それぞれの生地せいちに帰り戦友たちは眠っていた。澤田の胸にいる彼らは、はち切れそうな若さのままだった。白髪頭となった澤田の、あれからの三十年に何の意義があったのだろう。すべてが虚しい、と思うのは生きている者の驕りおごりだろうか。

ともあれ後は中山中尉の行方だけになつた。援護局業務第二課の返書へんしよの記載は、「昭和二十二年五月別府旧海軍病院を退院、帰郷ききやう」で終わっている。どこへ帰郷したのだろうか？澤田の記憶にあるのは、「満州生まれの満州育ち」といった言葉である。満州へ帰れる筈はない。とすると本籍地か知人の所になる。だが本籍地はソ連領となつた樺太カラフトであり、それも市町村名の記載がなければ、手のつけようがない。

日本国民であれば必ず戸籍があり、住民基本台帳がある。思い余つた澤田は役場へ行つて、樺太を本籍としていた人たちの戦後の籍はどうなったのかを尋ねてみた。

「戸籍簿は必ず二通作成しまして、一通は市町村役場に、もう一通は地方の法務局に

保管してあります。天災や火災による消失をまぬがれるためです。太平洋戦争で各地が焼けましたが、両方が無くなつた例は少ないです。沖縄の場合は福岡法務局にあつたそうです。ただ樺太の場合は例外で、ソ連軍の侵入が速かつたので両方とも無くなつています。

そのために、樺太に本籍のある人たちは、昭和二十七年に平和条約が発効し日本が独立するまで無籍者となつていました。

独立後になつて、家庭裁判所に届けた人は就籍しゆうせき、すなわち戸籍を作れたのです」

「じゃ、七年近くも樺太にいた人は日本人としての扱いを受けなかつたのかね」

「いやいや、臨時措置法りんじそちほうがあつて、婚姻届をすればそれが法的効力になつたのです。

本籍が内地にある女性と結婚すれば、女性の籍に記載することも認められていました」

「それじゃ、樺太の人たちは、日本全国へ散りじりになって、どこかで戸籍を作ったわけだ」

「そうです。お気の毒ですが探しようがありません」

最後の糸もぷつぷつりと切れた。この日本のどこかで中山中尉は生きていることに間違いはない。しかし探し出すことは至難であった。九九％は諦めていても、残る一％はまだ可能性が残っている、と望みを捨てはしなかった。

その一％の方法がどうしても思いつかぬまま数年が過ぎた。

着なれた服がどうも身に添わず、ベルトの穴が一つ二つと増えてきたときには、誰の目にも異常なほど痩せていた。

精密検査の結果を、妻に問い質し、癌と知ってもさほどの衝撃はなかった。会社は妻がいる限り安泰だし、二人の娘も片付けである。たった一つの心残りが中山中尉を探せなかったことである。限られた命を、縮めてもいいから知りたかった。

「福森さん。そういうわけなんです。ここに中山中尉に関する資料を持っていますので、お渡しします。どうかよろしくお願ひします。この通りです」

床の上に正座しようとする澤田氏を福森は押し止め、

「わかりました。上司にも相談してご希望に添えるよう努力します。お体に気をつけて吉報を待っていて下さい」

と言ったが、福森にも確たる自信があったわけではない。だが澤田氏は1%の望みといったが、可能性はもつとある、と福森は思っていた。

つるべ落しの秋の日はビルの彼方に沈んでいたが、空の明るさはまだ残っていた。

去ってゆく澤田氏の背に、時ならぬ銀杏いちよう落葉おちばが一ひら舞い落ちてきた。

社会部の部屋に上がり、萩本キャップに澤田氏の話を手短かに語った。

「うーん、で、福ちゃんはどこから手をつける気い？」

「はあ、たった今聞いたばかりで、これという決め手はまだ思い浮かびません。キャップの知恵を貸して下さいよ」

「満州生まれの満州育ち、本籍が樺太となればお手上げだ。昭和二十二年に別府の海軍病院を退院して帰郷、といったが、どこへ帰ったかが問題だ。満州も樺太も駄目だとすると友人、知人を頼るほかないのと違うか」

「友人、知人の範囲をしぼると……先ず同期の予備学生ですね」

「昭和十六年の予備学生だから、十期もしくはは九期だろう。まだあるぞ、出身校だつて満州とは限らん。おそらく日本へ来ていると思うよ」

「さーすがキャップ、鋭いですね、早速明



日から始めます。ありがとうございました」  
航空関係の予備学生は昭和十八年がピークで、一万名を越えている。予備学生制度が採用されたのは昭和九年で、太平洋戦争開戦後に急激に増えている。初期の採用者は一期二十名までの僅少きんしょうであり、昭和十六年度は九十三名、このうち整備科が四十九名いるので、残る四十四名が飛行科であった。

キャップは十期か九期といったが、正式には第八期となっていて、生残者は七名ほどであった。その中に中山中尉の名前も記されていたが、追跡調査の結果、戦後亡くなっている者が三名あった。残る三名に中山中尉のことを聞くと、名前に記憶があると答えた者が一名、あとの二名は忘れてい

て、思い出せないという返事だった。新兵教育の二か月間を共にした後は、各機種別、そして操縦、偵察ていさつと分れたのだから、終始行動を一緒にしない限り、忘れるのも無理がなく、福森は断念した。

しかし中山中尉の出身校が判明したのは思わぬ収穫であった。日露戦争当時の有名な激戦地R市にあったR高等学校から、京都市のD大学商学部に入學、昭和十六年三月に卒業していた。

D大は広大な御所と今出川通をはさんだ北側にある。正門で商学部の位置を聞き、学生らにまじって通路を歩く。くったくのない笑い声に包まれていると、学生時代がなつかしくなってくる。福森の郷里は長野県だが大学は東京のW大であった。D大ラ

グビー部との試合を応援かたがたよく見に行ったが、W大はいつも惨敗して悔しかったものである。

事務室で卒業者名簿を閲覧し、なかやまぜんえもん中山善右衛門の名を確認した後、福森は事務員にたずねた。

「ごく最近の同窓会名簿はありませんか」

「旧制大学の方たちのは、古いものしかありません。でも有志の人が集まって、卒業年次別の会を作っているんじゃないですか、そちらでお調べになればいかがでしょうか」

と言いつつ書棚から綴とじこ込みの書類を引き出してきた。

「えーと、昭和十六年ですね、あ、あります。いさよひ会、しもぎょうくごじょうたかくら下京区五条高倉二丁目五、

小島会計事務所内となっております。地図を書きますからお持ちになって下さい」

校門を出て福森はタクシーに乗った。地図を見せると運転手はうなずき、十分後には、ぴたりと小島会計事務所の前に停まった。

折良く小島氏は在所していて、心よく会ってくれた。小柄だが恰幅のいい老紳士で、如才なかった。来意をつげるとすぐ名簿を渡してくれた、

「残念ながら、この中になかやまぜんえもん中山善右衛門君の名前はありません。卒業時の四分の一ほどの数しか会員はおりません。戦死、病死、敗戦後の混乱等で連絡が絶えてそれっきり等で、ごらんの通り四十名に足りません。そやけどこの中に中山君と親しい交友があ

った者や、ゼミが一緒であった者がいるかもわかりません」

「そうですね、私もそれを期待してお伺いしたのです」

「じゃこうしましょう。私たちクラスのことでですから、私が責任を持って会員に連絡します。遠い地方の者もいますが、一か月以内にはご返事できるようお約束します」

「ありがとうございます。よろしくお願い致します」

福森の胸にぼんやりとはあるが灯がともった。茶をよばれながら雑談となったとき、会名のいさよひについて由来をたずねた。小島氏は相好をくずして笑いながら、「皆さんに聞かれますがね、いざよいと読んでもいいのです。陰暦いんれきの八月十五日を

明月めいげつというでしょう。翌十六日の夜の月のことをいさよひというのです。会員に俳人がいましてね、彼が名付け親なんです。昭和十六年卒業でしょう。いさよひは十六夜と書くので、十六の数字合わせであって、深い意味はないのですよ、は、は、は、は、」

御堂筋の銀杏並木が、上の方から黄ばみ始めだんだんと下枝へ色を移していき、やがて全体が黄色の炎となつて燃える。

澤田氏の依頼を引き受けて一か月が過ぎようとしている。そして今は小島氏の答を待つのみとなった。澤田氏の命のことを思うと、一日も早く解決したいが、焦っても仕方のないことだと福森は自分に言いきかせていた。

“戦争” 班の仕事は次から次と追いか

られる材料が多く、しばらくは陸軍の玉砕部隊の取材に駆けまわり、一段落ちついたときは、もう銀杏は散りつくし、寒々とした枝が風に揺れながら冬の到来を告げていた。

小島氏から電話があったのは、十二月に入って間もない日であった。

「あ、福森さんですか、小島ですが遅くなってすみません。あれからいろんな方法で会員に連絡をとりましたが、これといった情報は得られませんでした。ただ一人、和歌山市にいる稲垣君というのがゼミで中山君と一緒にだったことがわかりました。すぐ電話したのですが、運の悪いことに交通事故で入院しているのです。頭を強く打って意識不明だというので、私は飛んで行きました。

した。医者は生命に別条ないといってくれましたが、意識がもどり落ちつくまで少し日数がかかると思います。そういう事情なので今少し待って下さい。わかり次第お電話しますから――」

受話器を置いて福森は不安になった。何分にも老人であるから、いつ容態が変化しないとも限らない。万一の場合は、頼みの糸がぷつぷつりと切れる恐れがあり、現在の福森にはそれに代わる方法が考えつかない。福森にはそれにかいた。

「福ちゃん、何かあったのかい。えらくむずかしい顔をしてるやないか」

萩本キャップの声に我に返って電話の話をし、今までの経過をかいつまんで話した。「そうかい、だいたいの想像はついたが、

意識不明じゃ待つより仕方ないなあ。ところで福ちゃん、君の取材に協力しようと思つて、手をうつてあることがあるんだ」

「えっ、なんですかそれは」

「寮歌祭だよ」

「りょうかさい？」

旧制高校や大学予科は、生徒を寄宿寮に收容して教育をしたのだが、寮生によつて作詞された寮歌が愛誦され、高歌放吟、青春の血を燃やしたのである。

その人たちも今は六十路を越えた老人となつているが、青春時代への郷愁は捨て難いのである。か一堂に会して、声を限りに寮歌を咆哮し青春への回帰を夢見る会を結成したのである。東京、名古屋、大阪と毎年会場は変り、今年は福岡に決まっている。

「それでね、福岡本社で出場校を調べてもらったら、あつたんだよ！ R高校の名が！」

「キャップ！……」

福森は盲点をつかれ絶句した。

「いいの、いいのびっくりなくて。で、中山中尉の同期が一人でもいないか、それとも知っている先輩、後輩がいないか、誰もいなくても、出場者に依頼して探してもらうよう、福岡本社のデスクに頼んであるんだよ。開催日はあさつて、五日の夜だそうだ」

仕事のことは部下に任せっきりで、知らん顔をしているキャップだが、手抜かりがあれば黙って補い、さり気なくコツをわからせてくれる。

「ありがとうございます」

「礼なんかいいよ、まあ待つことだ」

キャップのいうように、今は待つことしかない、と福森は腹を据えた。

一週間後、小島氏から連絡があつた。

「あ、福森さん、お待ちせしました。稲垣君も思ったより早く意識を取りもどして、昨日面会ができました。中山君とはゼミの関係でよく会っていたそうです。時どきは下宿にも行って遅くまで遊んだといつてました。卒業後は戦争もあつてお互に音信不通のまま現在に及んでいるわけですが、いろいろ聞いてみると、下宿にはもう一人同級生がいた、というのです。名前を忘れていましたが、左足が悪く、いつも投げ出して座っていたのを覚えているそうです。

下宿は一条通りの戻り橋から西へはいっ

た、如水町によすいちちようといいました。いかがでしょう、

明日でも私のご案内しますからおいで願えませんか」

福森は確かな手ごたえのようなものを感じた。京都駅正面の出口で朝十時の約束を交かわして電話を切つた。

翌朝、京都駅で落合つた二人は如水町によすいちちようへタクシーをとばした。

この月三日に公示された、第三十七回の総選挙の運動も、ようやく峠にさしかかり、各候補の宣伝カーが、スピーカーのボリュームをいっぱいあげて候補者名を叫んでいるのを聞き流しながら、二人は情報を交換しあつた。

如水町によすいちちようは西陣の南はずれにあり、自動車が通りかねるほどの狭い通りであつた。

機屋はたや、染物屋そめものや、呉服問屋等ごふくどんやなどにまじって、八百屋、魚屋、骨とう店、古本屋、菓子屋などを商家の低い家並が左右に並んでいる。間口はさして広くないが奥行きは深く、そして暗い。戦災をまぬがれた古都は、昔ながらの格子作りの家並みが続き、どこからとなく機音はたおとが聞えてくる。

小さい辻の一角に、甘泉堂かんせんどうという菓子屋があり、ここが目指した下宿であった。

声をかけると奥の方から返事があり、かたかたと下駄の音をさせながら、白い割烹着をつけた五十歳ほどの婦人が姿を見せた。

「おこしやす」

と言いながら不審気な顔を向ける。

二人は名刺を出し、下宿のことを尋ねた。

「へえエうちは昭和のはじめから、ずうー

っと学生さんが下宿してはったそうえ、それもD大の方ばかりどす。今も裏の部屋に八人ばかりいてますえ。でも昭和の十五年前のことは知りまへんなあ」

この家へ嫁にきたのが二十五年で、主人は三年前に亡くなり、子供も結婚して別居している。今は八十三歳になる老母と二人だという。

ところがその老母は留守であった。寒くなるのと神経痛がでるので、親戚を頼って毎年白浜へ保養に行っているが、正月一週間ぐらいは家に帰ってくる、と言った。

「おばあちゃんはもうお歳ですけど、そりゃあもの覚えのええお人どす。そのお方のことも知ってはると思ひますえ」

二人は顔を見合わせた。小島氏は年末に

かけて仕事が山積しているので、一日として事務所をあけるわけにはいかなかった。福森も年内に片付けなければならぬ仕事を持っていたので、正月五日に再訪することにした。

堀川通りに出て、とあるグリルに入つて二人は軽い食事をとつた。

「小島さんのおかげで、どうやら目鼻がめはなつきそうです。ご尽力ありがとうございますまし

「いやいや、このぐらいのことをするのは当たり前です。クラスメートのことですから。どうか気になさらずに下さい」

今日と同じ時刻、同じ場所で、五日に会う約束をして、二人はグリルの前で別れた。

十八日の総選挙は戦後最低の投票率で終

り、年末二十七日、第二次中曾根内閣が発足した。

この日、郷里の長野県から、りんごが送られて来た。梱包のまま三和土たきに置かれていたが、爽やかな香りが部屋中に満ちていた。福森は阪急千里山線せんりやまの豊津駅とよつにあるマンションに住んでいる。結婚三年目で、目下妻の理恵りえは妊娠7か月の身重であつた。せり出している妻の腹を見ながらも、父親になる実感はまだ薄く、この腹の中に宿っている生命の不思議さに圧倒されていた。正月三日を、のんびりと妻と二人で過ごした福森は、容量いっぱいいっぱいに英気の充電をすませた。

五日、再び小島氏と連れ立って甘泉堂かんせんどうを訪問した。新年のあいさつもそこそこに、



奥へ通された。うす暗い通路を抜けると、小さい庭があり、枯山水になっていた。組石そせきには真っ青な苔がつき、いかにも年を経た感じであった。老婆はその庭の見える部屋にいた。両頬がたるんでいるが、目はいきいきと光りを放っており口元は締っていた。こたつに足を入れたままだったが、あいさつにもそつがなかった。

「ようおこしやす。中山さんのことはよう覚えておす。満州から来たお人で、ゆったりしたお人柄の上に、なんやこう、相手の人の心をあたたこうするようなふんいきをお持ちやした。三年間うちにおいやして、戦争が始まる年に兵隊に行きはりました。あくる年の正月に海軍さんの将校になって、ここへ寄らはったのが最後どす。戦死しや

はったもんじゃないこんでおした……。うですか生きてはりますの、逢いとおすなあ。え、足の悪いお人？あ、それは大西さんどす。あのお人は途中で田舎へ帰り、お家の仕事を継ぎはりました」

「大西さんと中山さんは、それはそれは仲がようおして、夏休みには二人で満州や四国へ旅行してはりました。え、大西さんの住所？それはここに書いておすえ」

和紙をとじた分厚い帖じょうを老婆は取り出して福森に渡してくれた。とうとうわかる時が来た、という喜びと、もし無かったら、という気持ち<sub>が</sub>が交り合い、緊張の余り指が震えた。

開いてみると、大正十三年四月からの下宿人の名前と郷里の住所がびっしりと書き並べてあった。二人の名前は昭和十三年四月のところに記されていた。

なかやま ぜんえもん  
中山善右衛門 まんしゅうこくあんざんしみなみにじょうどおりはち  
満州国鞍山市南二条通八

おおにし こうじ  
大西 孝治 とくしまけんみよしぐんみなみむらろくまるきゆう  
徳島県三好郡三並村六〇九

あった。遂にとびらは開かれた。福森は思わず小島氏と手を握りあった。

中山中尉が別府の海軍病院から行った先は、無二の親友であった大西の家より他に考えようがない。むしろ確信してもいい、と福森は思った。

念のためページを最後まで繰ってみた。昭和十五年三月、おおにしこうじ大西孝治退学帰郷と記されていて、老婆の話を裏づけた。最後は五十八年四月の八名であった。六十年という

長い期間に渡り、五百人に及ぶ若者たちがここに青春を過したのだ。それは老婆自身の歴史でもあった。

帰社した福森は、逐一キャップに報告し、徳島行きの許可を求めた。

「ああ、いいよ。じっくり取材して来てくれ」

「ありがとうございます。手持ちの仕事を片付け次第行って来ます」

澤田氏のことを思うと、一日も早い方がいいと思っても、現実の仕事は投げ槍にはできず、四日間を机で過ごした。明日発ちます、とキャップに言うと、

「福ちゃん、ついでにもう一つ行く所が増えたぞ、さつき福岡から電話があつてね、R高出身の医者が見つかったそうだ。しか

もだ：：」

といい煙草をくわえる。

「キャップ、じらさないで下さいよ」

「ごめんごめん、その医者は戦争中軍医として佐世保海軍病院かいぐんにいてね、中山中尉の手術をした、というんだよ。びっくりしたねえ、福ちゃんにとって、盆と正月が一度にきたようなもんだ。徳島が終わったら九州へ飛んでみるんだね、住所はここに書いてある。旅費の伝票も切つてあるから、経理でもらつてくれ」

大阪空港を七時に発つ全日航便ぜんにっこうびんに乗ろうと、まだうす暗い道をタクシーで走る。風が強く寒さも厳しかったが、福森の胸はずんでいた。

飛行機はレシプロのせいによく揺れたが、定刻に高松空港に着陸した。タクシーで高松駅へ直行、二十分ほどの余裕をもって、八時三十六分発の土佐三号に乗車することができた。暖房がよく効いていて、オーバ―を脱いで座席にくつろぐと、眠気をもよおし、いつの間にかぐつすりど寝入った。

騒々しい音に目を覚ますと、列車は鉄橋てつきょうを渡っていた。豊かな水量が眼下に流れている。聞かずとも吉野川だとわかる大河であつた。行く方に見える四国山脈の嶺々みねみねも、今越えて来た阿讃あさんの山々も一様に雪化粧をし、眩いばかりに輝いていた。

阿波I駅に降りる。目的の三並は次の駅なのだが、急行は停まらないので、ここからタクシーに乗ることにしたのであつた。

駅前の道は雪解けのためにしとどに濡れていた。

この町は交通の要地ようしよで、昔は葉タバコの産地として聞こえ、専売局の工場もあつたが今は廃止されている。それよりこの町の高校が、甲子園で春夏連続優勝はるなつれんぞくゆうしよしたため、全国に町名が知れ渡っている。三並村も町村合併でI町となっているのを、福森は調べてあつた。

客待ちをしているタクシーに近寄り、三並へ行きたい、という中年の運転手は笑いながら、どこの家でエと聞く。大西孝治おおにしこうじさんだ、と返事をする、

「大西孝治？」

と、しばらく考えていたが、やがてぽんと手を打って、

「わかった。元の郵便局長じゃ、三並では局長というたら大西さんと決まっとったけん」

タクシーは勢いよく走り出し、町並みを抜けて国道に出た。吉野川に添うて道は大きく左折し、近代的な橋を横目に見て南進なんしんした。五百米ほど行くと、今度は古い鋼鉄製こうてつせいの吊り橋があつた。

「昔はこの附近でたった一つの橋やったんでえ、昭和の初めから、さっきの新しい橋ができるまでの間、どのくらいの人や車が渡ったかわからんけど、ずいぶんお役に立ちましたでえ」

「橋が架かる前は、遠くの人はどうやって川を渡っていたのですか」

「渡し舟ですわ、人も荷物も、車でも。あ、

「ここです大西さんは」

車をおりると目の前に門柱があり、表札にはまぎれもなく大西孝治おおにしこうじと書かれていた。

比較的に新しい家で、ガラス戸の多い二階建てだった。

「ごめん下さい」

と声をかけると、奥の部屋の方から、

「おう、だれやあ、あがつて来いやあ」

と大声で返事があった。が、上がるわけにもゆかず、

「すみません。初めて参った者ですが」

と福森は少し大きな声で言った。

しばらくすると、障子を開ける音がし、暖かそうなセーターの上に袖無し半てんを着た老人が出てきた。

福森は名刺を差し出して、突然の訪問を

詫び単刀直入に質問した。

「大西さんは昔、京都のD大へ行かれましてか」

「ええ」

「その当時、中山善右衛門なかやまぜんえもんさんという方と友人になられましたか」

「うっ」

好々爺然こうこうやぜんとした柔和な顔が一瞬引き締まり、まじまじと福森を見つめたが、やがて元の顔にもどった。

「失礼じゃが、あなたは中山の何を知りたいのかね」

「では中山さんをご存知なんですね」

「知っている。よく知っているよ」

「その中山さんには是非お会いしたくて、参ったのです。お所をご存じでしたら、お教

え願えませんでしょうか」

大西氏の顔がゆがみ、唇がふるえた。

「中山は……中山は三年前に死んだよ」

「えっ、亡くなられた……」

奈落の底へ突き落とされたような絶望感に襲われ、福森は呆然と立っていた。ようやく探し当てた、と思つたのも束の間、山中尉はすでに白玉楼中の人であった。澤田氏の依頼を引き受けてから今まで、ただの一度も死亡していることを考えなかった。迂闊さが、われながら腹立たしかつた。

「ま、とにかく上がって下さい。それから話を聞きましょう」

先に立って案内してくれる大西氏の左足は、膝の屈折角度が浅く、歩く度に体が傾いた。

居間にはこたつが置かれ、こたつ板の上には、書籍やメモが雑然と積まれていた。

向いあつてこたつに足を入れると、大西氏はすぐポットの湯を注ぎ、茶をふるまつてくれる。熱い茶を口に含むと、渋さと甘さのまじり合つた味が何ともいえぬ美味さであつた。一杯を飲み終わると、大西氏はすぐ新しい茶を入れてくれる。二杯目をゆつくり飲んでいる間に、福森は落着きを取り戻した。

大西氏の頭髪はほとんど無く、見事な光沢をしていて、左手でしきりに撫でるのがどうやら癖になつているらしい。老眼鏡をかけて、さつき渡した福森の名刺を改めて読み、一人うなずくと福森に声をかけた。

「福森さん、Y新聞を私もとつていますが、

あなたは「戦争」欄の記者でしょう」

いい勘をしている、と福森は思いつつうなずいた。

「あれはいい記事です。欠かさず読んでいますよ。戦争なんて馬鹿げたことが二度とあつてはいけません。あの記事は、死者への鎮魂であり、現代の人々への警告だとわたしは思っています」

「その通りです。ありがとうございます」

「ところで話を変えますがね、Y新聞わいしんぶんの大阪本社から、パリにあるヨーロッパ支局へ派遣された記者で中山拓ひらくというのをご存知ないでしょうか」

「はあ、その人なら私の先輩記者で、私が  
新米記者当時、手とり足とり教えてくれた  
恩人です」

そう答えると、大西氏はいかにも嬉しそ  
うに破顔一笑した。

「その中山は、私の娘婿であり、あなたが  
尋ねている中山善右衛門なかもまぜんえもんの息子です」

「なんですつて……」

ぐあーんと棒でなぐられたような衝撃を  
受け、福森の脳は混乱した。

探し求めていた人の息子が、最も尊敬す  
る先輩であったとは、すぐには信じられな  
かった。ずいぶん廻り道をしたように思え  
る反面、中山姓を名乗る人は何万もいるか  
ら、先輩と中山中尉を結びつけることは、  
荒唐無稽こうとうむけいな話であり、自分が辿って来た道  
が間違いとは思えなかった。

興奮を静めようとして、やたらと煙草を  
吸い、茶をすすった。

「あなたが驚かれるのも無理はありません。わたしだってびっくりしとるんです。やがて家内が帰りますけん、何か作らせます。どうかゆっくりと腰落ちつけて話しましよ

う」  
福森は気を取り直して、澤田氏の話から大西家へ来るまでを順を追って語った。長い話が終るまで、大西氏は黙って聞いていた。終るまで一度として頭を撫でることなしに――。

しばらく静寂の刻が流れた。

「それにしても、大変なご苦勞をなさったのですね。中山ちゅうんさんが生きていたらどんなに喜んだかわかりません」

「ちゅんさん？」

「あ、それは学生時代の呼び名です。満州

生まれだった彼は、な●か●や●ま●より満州語の音読みの方がいいって自分でいったのです。ですからわたしはずっとそう呼んできました」

障子の外から声がし、間もなく夫人が盆に食事をのせて入ってきた。大西氏が福森を紹介すると、ぱっと笑顔になった。六十歳を越えているとは思えぬ、艶のある肌は若々しく、こちらの心まで明るくなるようだった。

熱あつの祖谷そばは最高のうまさで、福森は二杯も平げ、満腹した。

食後の一服が終ると、今度は大西氏の話が始まった。

隣県のT高等商業学校を卒業するとき、



大西の両親はしきりに帰郷をうながしたが、それを振り切って京都のD大へ入学したのは、大西の我が儘からであった。向学の志は表面上の飾り言葉であって、本当は田舎に居たくなかったのである。

大西の家は祖父の代から郵便局を經營しており、大西も三代目の局長が約束されていた。どこの田舎にもある三等郵便局で、局員もせいぜい十五人までの小さな局だったが、局長は一応村の名士であった。

従って、一人息子の大西は、生まれ落ちたときから、坊ちゃんと呼ばれ、甘やかされて育った。

小学校二年生の夏、吉野川の川原で遊んでいて、岩の上からすべり落ち、思い切り左膝を打ったのが原因で、左足は二十度ほ

どしか曲がらなくなった。

「不具の坊っちゃん」そんな陰口が耳に入ると、死んでしまいたいような劣等感にさいなまれ、よく学校を休んだ。自虐的になり、吉野川の急流に飛び込んで泳いだり、山の中を駆け廻ったりしているうちに、さして人に負けない自信が芽生えてきた。だが陰口が聞こえたり、会う村人が目を逸らせるのと、やるせなくなり陰うつになる。時には殴りつけたような狂暴心を持って余し、その家の飼猫を川に投げこんだこともあった。

中学校時代も大同小異で、これといった友人もできず、大西は孤独であった。両親は中学校がすめば、局の仕事をさせたいらしかつたが、大西は故郷を離れたかった。

どちらを向いても毎日同じ顔、そして憐憫れんぴんと軽蔑の視線の矢を思うと、身震いするほどの嫌悪感にとらわれた。

強引に両親を説得してT高商こうしょうに入学した大西は、未知の世界の開放感に酔いしれた。学友はもう大人であり、教養も備えていた。町へ出て行っても、誰一人知る者もなく、不自由な大西の姿を振り返る者もなかった。

在学中に日華事変にっかじへんが始まったが、学園の中は余波の片隣へんりんさえもなく平静であった。またたく間に三年が過ぎ、今度こそは家に帰って来るものと両親はたかをくくっていたが、またしても大西は期待を裏切ったのである。

それは当時の男性として避けることのできない、徴兵検査の年齢に達していたため、

否応もなく壮丁そうていとしてのランク付けをされるからであった。明治七年に発布はつぷされた徴兵令は満二十歳になる男子の中から、軍役に適う者を選び抜くために、国民の義務として強制的に検査を行い、甲こう、乙おつ、丙へい、丁ていとランク付けしたのである。甲種合格は現役兵として三年の兵役に服したが、乙以下は兵役をまぬがれることができた。しかし富国強兵を旗印に世界列強の仲間入りを目指した日本は、兵隊にあらざれば人にあらず、という風潮を一般国民に植え付け、甲種合格にならなかつた若者は肩身のせまい思いを強いられるのだった。

いわんや、大西の体では屈辱にまみれることが目に見えていた。大学生は徴兵検査を二十五歳まで延期することができたが、

大西はそれを期待したのではなく、検査後、兵役免除のレッテルを貼られた身を、のうのうと村人の前にさらすことに耐えられなかつたのである。

結局、T市の下宿から徳島連隊区司令部とくしまれんたいくしれいぶへ行って検査を受け、高商卒業こうしょうと同時に京都へ来たのだった。D大の校内にあつた下宿案内の貼紙を見て、如水町の甘泉堂にすいいちやうかんせんどうを知り、地図を片手に探り当てふとん袋を担ぎこんだ。

足が悪いから、二階へ上がる階段で苦勞していると、ふとん袋が突然宙に浮き、あつという間に大西の頭上を飛遊して部屋の中へ着陸した。後を追って部屋に入ると、一人の学生が笑いながら、「やあ、ぼくの隣の部屋の中山です。よろ

しく」

と挨拶をする。

「こちらこそ、ぼくは大西といいます。ふとん袋ありがとうございます」

すつと言葉が出た。内向的な性格の大西はいつも他人に対して、構えるところがあつた。ぎこちない応対振りしかできなかった。こんな自然な心でものをいえたのは初めてであつた。

満州生まれの満州育ち、と自己紹介した中山は、体軀たいくも堂々としていたが、大振りな顔の造作とともに、駘蕩たいとうとしたふんいきを醸かもしだしていた。

日が経つにしたがつて、大西は中山の大らかさに魅かれ、彼と離れ難くなつていった。中山は、大西の足のことなど全く眼中

になく、ただの一度として理由を聞かず、そのくせどんなに急ぐときでも、大西のペースに合わせるやさしさを持っていた。

何でも言える。何でも聞いてもらえる。

大西は親にも言えなかった胸中のわだかまりを中山には言えた。彼は寡黙であつたが、言葉は適切で暖かかつた。

その年の夏、満州へ帰省する中山に誘われ、大西は渡満した。生まれて初めての長い船旅だったが、玄界灘の荒波にもさして船酔いもせず大連に上陸することができた。

R市外の戦跡を巡った後、列車で北上し、中山の故郷鞍山へ直行した。駅前のポプラ並木の高さに度胆を抜かれ、群がる洋車や馬車に辟易しながらも、大西は異国の情緒を満喫した。

中山の家は小高い丘の麓にあり、和、中の折中家屋と広い庭を擁していた。両親に歓待され、大西はのびのびと日を送った。奉天（瀋陽）遼陽へ日帰り旅行をした後、二人はさらに北上し、新京（長春）ハルピンまで足をのばした。

行けども行けども、赤土の荒野が続き、地平線も定かでない茫々漠々とした広さに大西は圧倒された。緑が見えるとそれは高粱畑で、電柱の頭だけが突き出ているほどの高さに成育していた。その真中を列車はまた何時間も走る。そしてまた荒野――。大西の感覚は麻痺しそうになっていた。

ハルピンのヨーロッパ情緒にもしびれた。スングアリーの外輪船、広大なロシア人墓地を吹き抜ける風の寂しさ、夜霧のたちこめ

るキタイスカヤ通りの哀愁、すべて夢のようであった。「ハルピンは帝政の世の夢のごと　白き花のみ咲く五月さつきかな」ふつと浮かんだ与謝野晶子よさのあきこの歌が見にしみた。

ある夕方、大西は一人で中山家の裏の丘に登った。北を見ると東洋一の製鉄所が、群立する煙突とともに煙りの中に霞んでいた。遥か南には、墨絵のような千山せんざんの山容さんようが望める。そして東西は遮る物一つなく、地平の果てさえも見えなかった。

一片の雲もない空を残して、太陽が沈もうとしていた。オレンジ色であった太陽が地平線に近づくにつれて真紅に染まり、だんだんと大きくなる。下端かたんが地平線に接する頃には想像を絶する大真円だいしんえんとなっていた。またたきさえも忘れて大西は見入り、心を

奪れて立ち尽くしていた。目に見えて太陽は欠け始め、半分となり、三分の一となり、最後は一粒の宝石の輝きを放って消えた。

大自然のスペクタクルに、大西はしたたかに酔わされた。夕陽と自分しか存在していなかったような錯覚から、なかなか抜け出せなかった。

大陸の気候は、夏でも日が落ちると寒いほどに冷える。我に返った大西は丘をくだりながら心の底に今まで沈殿ちんでんしていた、しこりのようなものが跡形もなく消えているのに気づいていた。

自然の前には、人間なんて何と卑小な存在であることか。悠久の昔から続いている人間の営みにどれほどの進化があっただろうか。千年前の人々と同じような喜怒哀楽

をくり返して生き、そして死んでいく。と  
るに足りないちっぽけな存在であっても、  
それなりに精いっぱい努力を続ける人間  
の尊さに思い至った大西は、豁然かつぜんと心が開  
いたのを悟った。

今までの狷介けんかいそのものの自分が恥ずかし  
かった。故郷の人々に謝りたい、と心底か  
ら思った。

鞍山あんざんを発つ日、雑貨類の卸し会社を経営  
している中山の父親は、出張で留守だった  
が、母親が見送りに駅まで来てくれた。今  
にして思えば、両親ともに一期一会いちごいちえの人で  
あった。

翌年の夏は、三並村みなみむらへ中山を誘った。  
吉野川の清流に鮎を釣り、藍いろの渚に  
泳ぎ、歩危ほけを逍遙しょうようした。

祖谷川いながわに沿う断崖絶壁の、羊腸ようちようとした道  
を奥へ辿り、蔓橋かずらばしまで一日がかりで二人は  
歩いた。小さい旅人宿たびびとやどのランプの下で、大  
西は平家部落の今昔いまむかしを語った。

当時の大西の家は、現在斜め前に建って  
いる郵便局の敷地いっばいに屋敷があり、  
表を改造して局の事務所じむしょにしていた。奥の  
部屋からは吉野川と向う岸の土佐街道が見  
えていた。

「おれ、こんな所に住みたいよ」  
川の流れを見ていた中山がぼつんと言っ  
た。  
「何をいう、こんな変化のない山奥じゃ、  
窒息してしまうぞ。おれは満州に住みたい  
よ」

「それじゃあ、あべこべじゃないか」

「まあ、気が向いたら、いつでも来てくれ。おれも満州へ行くさ」

大西は本気でそう思っていた。

翌年二月、大西の父が軽い脳溢血で倒れた。しばらくは局長不在で業務は続けられたが、全快の見込みが立たず、大西の帰郷を促してきた。学業にさして未練はなかったが、中山と別れることが最大の痛恨であった。

「なあに、いつでも会えるさ、日本は狭いよ」

と中山は事もなげに言って笑った。

言葉通り、その夏も彼は三並村へ来て、大西の新米局長振りに目を細め、

「なかなか板についてるじゃないか、親譲りの血は争えんなあ」

と笑った。

二、三日いて中山は満州へ帰った。病人がいるので大西も敢えて引き止めなかったが、心残りであった。

翌昭和十六年四月、桜の花がほころびかけた頃、突然中山が顔を見せた。

「やあ、卒業おめでとう。いよいよ満州へ帰って社長の見習いをやるのかい」

「は、は、は、ところがそううまく事は運ばないのだ」

「どうして？」

「徴兵ちようへい猶余ゆうよの期間はまだ二年残っているが、ついでのことに今からお努めして来ることにしたんだ」

大西はもう兵役へいえきのことは忘れてしまっていたので、言葉に詰まった。

「これだけは逃げようがないからね——。仕方がないからちよっぴり贅沢して、海軍へ二年ほど行つてくることにしたんだ」

中山はR高時代、グライダー部にいて、ソアラ―級の免許を取得していたので、予備飛行学生として優先的に採用されたのだった。

「おれ、一度もグライダーの話聞いてないよ」

「いやあ、すまんすまん、必要なかったし、それにグライダーなんて子供だましのようなものだったから——」

こういうところが、中山の持ち味で、大西には彼の心使いが痛いほど身にしむのだった。

十日ほど滞在したあと、中山は霞ヶ浦

航空隊へ発つて行つた。

その年の十二月八日、あろうことか日本は米英に戦端を開いた。

「えらいことになった」

と大西は一番に中山のことに思いを馳せた。まだ第一線へは出ていないだろうが、やがて彼も戦場へ行く、そして——。それから先は考えたくなかった。勝った、勝ったの新聞記事が続くので、多少の安心感はあるが、便りの無いのが気がかりだった。

昭和十七年二月末、その日は朝から底冷えが続いていたが、昼間から雪が降り出した。火鉢に炭をつぎ足そうと腰を浮かしたとき、勢よくガラス戸が開いた。見ると肩に雪をのせた海軍士官がつかつかと入ってくる。



「ようっ」

と言いつつ白手袋の手をあげて挙手の礼をした。

「あつ、中山<sup>ちゅんざん</sup>！」

日焼けこそしているが、前と変らぬ中山<sup>なかやま</sup>の顔がほころんでいた。

奥のわが家へ招じ入れたが、何から話をしているのかわからなかった。

「いつまで？」

と真つ先にきいた。

「それがなあ、ゆっくりできんのじゃ。晩には小松島<sup>こまつしま</sup>の航空隊へ帰っていなきやならんのだ」

「えっ、それじゃ次の汽車に乗らにやならんやないか」

「は、は、そういうことなんだ」

そばを打つ時間もなかった。女子局員に

頼んで飯を炊いてもらい、鮎の干物をあぶったのと、香の物を並べるのがせい一ぱいであった。彼は悠々と箸を運び、一升の飯の大半を腹に入れた。

雪の降りしきる中を、大西は駅まで彼を送った。

「おい、死ぬなよ」

すべての思いをこめて中山の手を握った。

彼は黙つてうなづき、車中の人となった。

ラジオや新聞報道の戦勝ニュースが、齒切れ悪くなり、ガダルカナル島からの転進を告げた頃には、村の青壮年<sup>せいそうねん</sup>はほとんど召集されていた。高等小学校を卒業したばかりの少年も、四十歳を越えた初老に近い人々も軍隊の門をくぐった。

村にも戦死者が増え、大西の学校友だちも何名かがその中にはいつていた。

中山からは葉書が一枚来たのみで、任地も生死もそれ以後は皆目わからなかった。

ひとうせんせん比島戦線に、かみかせとくべつこうげきたい神風特別攻撃隊が結成され、

次々と敵艦に体当りするニュースが発表されるたびに、大西は全神経を耳にして、隊員の氏名を聞いていた。二十年になると米軍の沖縄上陸、大都市の爆撃が始まり、日本の劣勢は誰の目にも明らかになっていった。七月になると空襲は無差別に地方都市を焼き尽くし、被災者が知り合いを頼って、この三並村にも来るようになった。

日本はどうなるのだろう、と口にこそ出さないが、皆一様に不安が渦を巻いていた。

遂に八月十五日、終戦の詔勅しやうちよくが下り戦争

は終結した。

国土も人の心も荒廃し切っていたが、大西は郵便業務を一日として疎かにはしなかった。どんな世の中になろうとも、郵便局は大西の城であった。明治初年に祖父が始めた郵便役所が、三等郵便局と改正され、昭和十六年には特定郵便局と改称されたが、三代七十年の努力と愛情が備品一つにも浸透していた。

日本が占領されても、郵便事業がなくなることは万に一つもない、と大西は確信していたのである。

混沌とした世相が続いたが、山奥の村は平静であった。食糧状態が悪いといっても、村人は代々粗食に馴れていて、そば粉や芋類で不満はなかった。

軍人の復員や、外地<sup>がいちきよじゆうしや</sup>居住者の引き揚げが進み、物資<sup>ぶつし</sup>欠乏<sup>けつぼう</sup>によるインフレが昂進<sup>こうしん</sup>し、国民は塗炭<sup>とたん</sup>の苦しみにあえぐ日が続いた。

昭和二十二年五月のある日、リュックの上<sup>うへ</sup>に毛布をのせた復員兵<sup>ふくいんへい</sup>が局にはいつて来た。大西を見て、照れくさそうににやつと笑った。

「中山<sup>ちゅうざん</sup>！」

大西は飛び出して行き、夢中で抱きついた。

「よう帰って来た、よう帰って来た！」

涙が止まらなかつた。

痩せている、と大西は直感した。顔色も青白く、頬がこけていた。体を離そうとしたとき大西はさらに驚きの声をあげた。

「あつ！お、お前、こ、この手エ！」

中山<sup>なかやま</sup>の右袖をつかんでいたが、あるべき腕がなかつたのである。

「ああ、ちよいとしたことで無くしたんだ」  
慰める言葉もなく、大西はおろおろと奥へ中山を案内した。

大西の父は十九年に亡くなっており、今は母と二人なので、どの部屋でも気がねなく使ってもらえる。

風呂からあがった中山に、大西の裕<sup>あわせ</sup>を着てもらった。窓から吹きこむ川風に、右袖がひらひらと躍った。

三人で夜の食卓<sup>しょくたく</sup>を囲んだとき中山は改めて厄介になることを詫びた。

「水臭いことをいうな」

言下<sup>げんか</sup>に大西は一笑した。

「それともう一つ、戦争のことも、この腕

のことも聞かんでくれ。勝手にいってすまんが友情に免じて許してくれんか」

「わかった、約束するよ」

中山は左手の指を器用に使い、箸さばきも鮮かであった。母子がそれを見ているのに気づくと、

「もう馴れていますから、不自由は感じないですよ、お母さん」

と母に向って屈託なく笑いかけた。

食後、二人になったとき大西は思い切つて中山にたずねた。

「満州のご両親は？」

「おそろくー！」

と言葉を濁しながら、中山は首を左右に振った。

大西は戦争を呪った。中山家の人々を

たずたに引き裂いた奴が憎かった。声を荒げてののしってやりたい、と体が震えるような怒りを覚えた。

ほととぎすの声を聞く頃になると、青白かった中山の顔に血色がもどり、頬も昔のように豊かになった。大西の書架の本を読み、散歩をし、顔知りとなつた配達係の局員について、村中を巡り、果ては劍山つるぎさんへ登つて来ても、さして疲労の色を見せぬまで体力も回復したようであった。

この年は超インフレ時代で、大西などの公務員給与ペースが千八百円、米のヤミ値いっしょうひやくごじゅうえんが一升百五拾円、ラシヤ地じの背広であれば七千円以上という給与きゅうよしょとくしや所得者のどん底時代であった。

二十三年になつても、インフレの炎はま

すます勢いを増して止まる所を知らなかった。  
た。

山々の雪も消え、川べりには淡い緑色をしたふき蔭のとう臺が、むっくりと頭をもたげ出した頃、夕食後に中山が話しかけてきた。

「なあ、大西、配達の水野じいさんが辞めるそうやな？」

「ああ、もう六十やからな、山道はしんどいいうて——」

「誰か代りは決まったか？」

「いやあ、配達はきどい●●●（根気のいる）仕事の上に、月給が安いので、来てくれる者もんがおらんのじゃ」

「そうか、困っておるのやったら、俺を雇うてくれ」

ずばっと言われて大西はあっ気にとられ

た。

「阿呆なこというな！ 大学出の学士さんのやる仕事か！ お前はもつと他に……」

と、言いつのろうとする大西を制して、  
「古いことをいうな、これからの日本は価値観が百八十度の転換をするだろう、従ついて行ける人、行けない人ができる。どうやら俺は行けん方らしい。お前のお荷物になるかもわからんが、俺はこの土地が最初から気に入ってるし、終ついの棲家すみかを持つには今がチャンスだと決めた。わかってくれ」

大西は胸がつまった。彼の故郷満州はもうない。そして本籍地の樺太もない。彼には帰るべきちよつとの土地も、肉親もいないのだった。しかしまだ迷った。山奥の一郵便配達夫とするには、彼の才能や学歴は

余りにももったいない。それ等を發揮する場所は他にある、と思った。

「おい、考えることないだろう」

「いや、お前を雇うのは簡単だが、それにしても郵便配達なんて……」

「なんて、とはどういうことだ。いやしく

も局長のいう言葉とは思えん。『信書往復ハ

全国ノ景況声息ヲ通シ物貨平準ノ路ヲ疏シ

實ニ治国ノ重件世上交際ノ要事ニ候処（中

略）追々官便郵伝ノ方法相設国内アマネク

信書ノ往復自由ナラシメ候様イタシ度（後

略）お前、よもや創業の精神を忘れたので

はないだろう」

「すまん、取り消すよ」

中山が古い郵便史を読んでいたとは大西も気づかなかつたが、彼の性格を知り尽く

しているだけに、領かないわけにはいかなかった。

四月一日付の採用が内定すると、中山は大西の前に三万円の金を差し出した。

「勝手な頼みだが、これで小屋を建ててく

れんか、土地はどこでもいいから。これっ

ぽちでは今時の物価じゃ寝る所だけだろう

な」

「それにしても大金だよ」

「なあに、復員手当と、右腕の代償だよ」

局から半キロばかり南へ行つた所を、左

の山へちよつと上がると平地がある。耕せば畑になるだろうが、人手が足りないため

に打ち捨ててあつた。二〇〇坪ほどの広さ

はある。大西はその自己所有地を提供す

ることにした。

台所、風呂場、便所と二部屋、十三坪ほどの家が建った。木材は大西の山から切り出したから、大工などの手間賃と、たてぐるい建具類、せたいどうぐいつしきなど世帯道具一式等合わせても金は少し余った。こうして、後のち「片腕の郵便屋さん」といってむらびと村人に親しまれた、大学出の郵便配達員が誕生した。

配達員は五人いたが、毎日四人が配達に出る。かみにし上西、まるお丸尾、かわばた川端、たりに多利、であいかくぶらく出合各部落に分かれ、配達がすめば帰りに、散在するポスの郵便物を持ち帰る。

配達区域は、吉野川沿いに南へ六キロほど、そこから支流の祖谷川沿いの街道を五キロほど奥に入る。だが平坦な道添いにある家ばかりではない。曲がりくねったけもの道を、一時間もかけて登らなければなら

ない家が、山々に散在する。次の一軒へ行くためにはけもの道を街道やたにかわ溪川まで下り、そしてまた一時間を要して登るのである。冬は雪がよく降るため、かんじき橇が離されなかつた。一日のべ三十キロ以上の山道を歩くには、並の体力では到底できない仕事であつた。

だが中山はいちご一語の弱音も吐かず、休むこともなく続けた。大西に対しても公私の別をわきま弁え、出しゃばるような言動は決してしなかつた。

一年もせぬうちに、なんとなく中山の噂が大西の耳に入るようになった。

「あの片腕の郵便屋さんは、きしよく（気持）のええ人じゃ、無駄口きかんし、やさしいてエ」

「ほんまや、うちもこないだ（少し前の日）  
老眼鏡ろうがんきょうが見つからんで、手紙が書けんいう  
たら、左手ですらすら代筆してくれたんで  
よオ」

村人の評判は上々であつたが、代筆の時  
間は途中の道を急がなければ埋め合わせで  
きないのである。配達時間にも厳然げんぜんとした  
規則があり、帰局時間に遅れると理由書が  
いる。

「そろそろ嫁さんを探さにや」  
と、自分も独身であることを忘れて、大  
西は中山の伴侶のことを思った。

ところが緑は不思議なもので、大西の方  
が先に結婚することになった。I町の郵便  
局長が仲人で、定光さだみつの郵便局長の娘が相手  
だった。お互い同業同志なので、とんとん

と話が決まったのであつた。

婚約中もそうであつたが、新婚生活の中  
でも大西は新妻に向つて中山の話をした。

「あんたア、自分のことはなあんに喋ら  
んねエ」

と笑われるほどだつた。

翌年の秋、妻の和枝かずえは妊娠した。その頃  
のある日、村人が切手を買ひに来てこうい  
つた。

「局長さん、ここの片腕の郵便屋さんも早  
よう嫁さんもらわにや気の毒やねえ、こな  
いだの晩も、釣りにいて川の中へ落ちたい  
うて、ずぶ濡れになつて帰るところに会うた  
がな、嫁さんがおりやあ、晩にでかけるこ  
ともせんだろにイ」

その通りだ、と大西はうなづき、本腰を



入れて中山の嫁を探さなきゃならん、と思  
った。

それから十日も経たない夜遅く、中山が  
やって来て、話がある、という。

「実はな、おれ結婚することにしたんだ」

「えっ、ほんまか？誰とや？」

大西は虚をつかれて、一瞬疑った。

「川向うの白馬温泉はくばおんせんで働いている、加代かよつ  
て娘知ってるだろう」

「ああ、この春満州から母娘おやこで引き揚げて  
来て、あそこへ住みこんだ娘だろ、しかし

あの娘はお前……」

と大西はいい澱よどんだ。

白馬温泉というのは、古くからある料理  
旅館の名前で、近辺きんぺんに一軒しかなかったの  
で、土地の者も旅行者もよく利用するため、

繁盛ひきあげものしていた。引揚者の母娘は、亡夫なきおつとの郷里きょうり  
である村へ帰って来たものの、身寄りもな  
く、ちようど人手を欲しがっていた白馬温  
泉に住み込んだ。やっと糊口ここうをしのぐこと  
ができるようになったが、不幸は重なるも  
ので、母親の方は引き揚げの心労からか二  
か月後に急死した。

一人残った娘はそのまま白馬温泉で働い  
ていたのだが、最近になって身籠もってい  
ることがわかった。満州時代には相当なく  
らしをしていた、と思われる上品な物腰と、  
言葉使いをし、一口にいえば窈窕ようちようとした美  
人であった。

口さがない村人の恰好な話の種にされて  
いたが、妊娠の事実が誰の目にもわかるよ  
うになると、今度は相手の男性の憶測に話

は湧いた。独身者はもちろん、妻帯者も槍玉にあげられたあげく、七十歳近い白馬温泉の主人までが名を連ねさせられる始末だった。

だが中山の名はついぞ聞こえて来なかった。

「わかっている。あれはおれの子なんだ。黙っていて悪かったが、正式に結婚して家へ引き取る決心をしたんだ。よろしく頼む」  
細かい経緯いきさつを聞きたかったが、こういう時の中山の顔は、茫洋ぼうようとして摘み所がなく、そのくせ言葉を翻すひるがえことは絶対になかった。

ささやかな披露宴をし、婚姻届を提出して加代かよは中山なかやまの妻となり、翌年二月男子を出生した。拓ひろくと名付けられて丈夫に育つて

いき、中山家には活気が満ち溢れ、よそ目にも幸福そのものようであった。

これで中山も、やっと人並みの人生が送れる、と大西は彼のために祝福した。その夏、大西も女子を得て父親となった。由紀と名付け、拓ひろくと兄妹のように仲よく成長していった。

二十七年には講和条約が成立、中山は晴れて就籍しゅうせきし、名実ともに三並村の住人となった。

妻の加代かよは、万事控え目な性質だったが、洋裁の技術に長けていて、中古のミシンを購入して頼まれた衣服の修繕や仕立てをして家計を助けた。

子供たちは伸びのびと育ち、両家を自由に往き来し、五年後に生まれた大西の長男

も、二人の弟としてその仲間に加わった。

「どうせ親は先に死ぬんだ。そのときに子供が困らんように、今から独り立ちの精神を身につけてやろうじゃないか」

と、中山と二人で意見が一致し、両夫婦で話し合ったのもその頃であった。

自分の部屋の掃除、夕食の後片付け、時には炊事等小学生からやらせた。中学生になると、下着類の洗濯と野菜作りのノルマを増やした。両家がそうであったから、子供らはごく自然に見につけ、工夫しあい、勉強の時間もきちんと自己管理するので親の出番は少なかった。

拓ひらくが中学三年生になる直前、母親の加代かよが肺炎で亡くなった。四十歳の若さであった。元来が蒲柳ほりゆうの体質ではあったが、激動

の時代を揉まれ抜いた心労もその原因の一つではなかっただろうか。

中山なかやまの幸せもわずか十五年間であった。胸中を押し量ると、大西は天を恨まずにはいられなかった。

拓ひらくを家に預かるうか、と妻の和枝かずえがいったとき大西は言下に反対した。

「ばか！なんのために子供に自立のしつけをして来たんだ。中山ちゆんさんにいつてみる！絶交されるぞ！」

人にはそれぞれの運命があるのだ。逆いさかようもなく逃げることもできない。他人の痛みをわが痛みとして思いやる他に何の手助けもしてやれないのだ。

和枝かずえが心配するほどのこともなく、中山なかやま父子おやこは従来通りのくらしを続け、拓ひらくと大西

の子供たちの仲も何ら変りはしなかった。

高校生になった拓ひろくの体は父親似で、もう中山の丈を越すほどになり、母親似の顔はなかなかの美男子になっていた。成績もよく、すんなりと東京のT大に合格した。上京する前日、一人で大西の家に来た拓ひろくは、「おじさん、親爺をよろしくお願いします。ぼくは親爺が、おやじが……」

後はいえず、大西の膝をつかんで号泣した。

いい息子だった。大西は中山なかやまが羨ましかった。

その年末、入試と留年問題に端を發したT大の学園闘争は、正月に入ると遂に武力行使の惨事を招いた。有名なY講堂の攻防戦で、警察機動隊と学生が血みどろの暴力

行為を繰りひろげた。

夏にはアポロ十一号が月面に着陸し、四十五年にはよど号事件、三島由紀夫の割腹かっぶく事件があつた。

拓ひろくの卒業の年には、二十八年間も密林に潜んでいた軍人が發見され、浅間山莊の銃撃戦があり、平和に倦うんだ日本人の心の歪ひずみを露出しているようであつた。

「もし、拓ひろくが浅間山莊の仲間であつたら、どうする」

と大西は中山に聞いた。

「拓ひろくを殺しておれも死ぬ」

迫力のある答が返ってきた。中山ならばやり兼ねない、と思う反面、そんなくらない息子じゃないという強い自信がうかがわれた。

拓ひろくは卒業と同時にY新聞大阪本社に入社し、報道の道を選んだ。

三年後には、当然のように由紀と結婚し、五十二年には男子、五十四年には女子、と二人の父親になった。

中山も大西も、同時に祖父となり、共に還暦を迎えていた。中山は満三十年間在職した郵便局を退職、紺色の制服を脱いだ。しかし配達請負人制度を利用して、三日に一度は局に来て仕事をした。

退職金を局長として、中山に渡したとき、大半を大西の前に置き、身体障害者施設へ匿名で寄附してくれ、といった。

昭和二十八年四月に、恩給法が施行された折、大西は中山に向かって、軍人恩給はむろんのこと、傷痍恩給をもらうよう進言

したことがあった。

「いや、おれは要らない。ここで働いている以上生活には困らないし、歳をとっても年金がある」

と、拒絶し、恬淡てんたんとしていた。

そのことは後年、ふっと本音を洩らしたことがある。

「戦後の人生は、借りものであって、生きているだけでも、もったいないと思ってる。二十歳はたち前後で戦死した彼らに、いつもすまない気持ちでいっぱいなんだ。おれの命は彼らからの借りもので、それも返すことができないのだよ。大きな顔をして恩給をもらうのは、彼らへの裏切り行為としかおれには思えなかったよ。今もそうだけどもー！」

戦争の傷は深い。そして消えることはなく、年経るとともに鮮かになっていく。大西には中山の心情が理解できた。

『疏食を飯ひ、水を飲み、肱を曲げて之を枕とす、楽しみも亦其の中に在り。不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し』

論語の一節が思わず、脳裡に浮かんだ。

中山の亡くなる三日前、川岸の桜を見ながら二人で酒を酌んだ。昔からそうであったが、二人で向き合っているにも余り話はない。会っていれば心足りるのであった。

「子、川の上に在りて日はく、『逝く者は斯の如きかな』：」  
ぽつんと中山がいった。

「昼夜を舍かず」

と大西が続けた。二人が相識して四十年

の歳月が流れていた。

配達請負人として、早朝に来局しなければならぬ中山が、その朝に限って時間通りに出てこなかった。今まで一度もないことなので、大西は不安を覚えた。不自由な足を急がせて中山の家へ馳けた。

玄関の戸を開けると同時に、土間に倒れている中山の姿が見え、いびきが聞えた。

「脳溢血！」

突嗟に大西は判断し、電話にとびついた。救急車を待つ間、大西は中山の左手を握っていた。片方の靴は履いていたが、もう一方の靴は底を見せてころがっていた。出かけようとした所だったのが、一目で了解された。

意識不明のまま、それから三日間、中山

は病院にいた。拓ひろく、由紀の夫婦が孫を連れて駆け戻り、大西夫婦とともに病床を取り囲んだ。

いびきが止んだとき、中山の顔にかすかな微笑みが浮かんだように見えた。

「野辺の送りをすませた後、拓ひろくと一緒に仏壇を整理したのですが、両親や妻君の位牌と並んで、無銘むめいの位牌が一つありました。その下から一枚の写真が出てきました。複写しまして一枚は拓ひろくが持っていますが、現物はわたしが仏壇とともに預って、この家にあります。ご覧になって下さい」

大西氏は立ち上がった、一枚の写真を持って来た。キャビネ判の大ききで、四隅はすり切れて丸くなり、色も黄変していたが、写っている人物の顔ははっきりしていた。

四発きゆうななだいていの九七大艇を遠景えんけいに置き、前列の七人は椅子にかけ、後列の四人は立っている。裏を返すと、昭和二十年一月二十日、於東港基地とうこうきちにおいて、中山機搭乗員なかやまきとうじょういん一同と走り書きがしてあった。

福森は一人ひとりの顔を丹念に見ていた。後列右端に、腕を組んで大人ぶっているが、まだあどけない少年の顔をしている搭乗員に見覚えのある澤田氏の顔がだぶった。

「この真ん中なかやまが中山なかやまです。後にも先にも軍隊時代の中山なかやまの写真を見たことはありません。彼はこの写真の人々に、生涯詫び続けていたのでしょうか」

大西氏は声をつまらせ、瞼を押さえた。うっすらと雪の積んだ道を、福森は大西

氏に案内されて中山家の墓へ行った。そこは中山家の地所の一画で、吉野川の流れが一望にできた。

止んでいた雪が、またひとしきり降りだし、周囲の山々を白い帷とほりの奥へ隠す。

：：：なつはみだるるほたるびの、きみがはかばにとべるとも（略）ふゆはましろとほきねむりのゆめまくら、おそるるなかれわがははよ：：：

胸の中で、島崎藤村しまざきとうそんの詩を誦そらんじながら福森は中山中尉の冥福を祈った。

泊まって行ってくれ、と懇願する大西夫妻の願いを丁重にことわり、福森はその夜、高松まで引き返して一泊した。翌日は福岡へ飛ぶ予定だったからである。

大西氏に会ったことで、福森の目的は十分に達せられていたのだが、福岡本社の社部や、R高の同窓生の協力を、無下にすることはできなかつた。

ホテルから澤田氏の自宅へ電話を入れ、今までの経過と、中山中尉の死を告げた。

「：：：：：そうですか、中山機長は亡くなられていましたか。早速お墓参りに行きます。福森さんにはお礼の申しあげようもあります。せんが、心から感謝しております。本当にありがとうございます」

澤田氏の声は湿り、息切れがひどかった。

「お体の方はいかがですか」

と、福森は思わず聞いた。

「体？ああご心配なく。墓参りに行くことぐらい平気です」



とは言っても、大分弱っていることが察せられた。

翌日、午前の T D A 航空便に乗り、昼前には福岡空港に着いていた。医者の住所は、筑紫野市二日市町という温泉町であった。

タクシーに乗り、福岡南バイパスを南下する。大野木市、太宰府市を通り抜けると、すぐ国鉄二日市駅があった。駅前の食堂で昼食をとりながら、長野外科病院をきくと、菅原道真の恩賜の御衣で有名な天拝山の麓だとわかった。

歩いても二十分ほどだといので、教えられた道を辿って行った。町並みが途切れるとすぐ看板が見えた。迷うことなく病院に入り、受付けに名刺を通した。しばらく待たされた後、若い看護婦がやって来、案

内するといいいながら、一旦病院の外に出た。垣かきねに沿って病院の裏側に廻ると、和風の玄関があり、はいると長野医師が待っていた。応接室で互に自己紹介した後、椅子にくつろいだ。

長野医師は小柄な体ながら、引き締った筋肉を白衣に包み、ごま塩頭の下の眼光は鋭く光っていた。いかにもやり手の外科医といった風格があった。

「中山中尉が R 高出身と分ったのは、問診のときです。ぼくより四年後輩になる。彼を覚えているのは、R 高の後輩ということもあつたが、手術が難しく、もうすこしで彼を死なす所だったからだ……」

問診しつつ中尉の傷口を改めて見た。予め送られて来ていた東港基地とうこうきちの軍医の所見

書を読み、切腹未遂のことは知っていた。右腕の切断個所の傷は順調に塞がりつつあったが、腹の傷は化膿しかけていた。遅れると腹膜炎になり命を落とす。現代と違って抗生物質などはなかったから、手術を急いだ。

手術は成功した、と長野軍医は自信を持ったが一週間経っても熱が下がらない。どうもおかしい、ともう一度全身を調べた結果、生殖器部位、具体的にいうと辜丸、陰嚢に強く打った痕があり、陰嚢内は白膜が切れて皮下出血し、放置したままだったので、すでに腐敗の兆候が見えはじめていた。

もう少し発見が遅れていたら、危いところだった。相当痛んだはずだが、中山中尉は一言も訴えず、何も感じないような平然

とした顔をしていた。

——生きることを諦めているのか、それともがまん強いのか——

長野軍医は驚きながらも、細心の注意を払いつつ手術にかかった。結局左辜丸を摘出したが、その他にも膀胱、前立腺にも異常があつて治療には長時間を要することになった。

「まあ、命を取り止めたのが奇跡のようなもので、辜丸が一個になつても、男性機能に差し支えないからね。もっとも精管を切ったから、子供を作ることとは不可能になつたが、死ぬよりはいいだろうって、中山を励ましてやったよ」

「精管ってなんですか」

「それはね、辜丸で作られた精子を、体外

に運び出す管のことで、これを切断することを最近パイプカットといってるがね」

「自然に治ることはありませんか？」

「ないね。手術をしても駄目だよ」

長野医師は重大なことを口外した。戦争中の軍人のことはいえ、患者の秘密を医師が外部へ洩らすことは罪に値するのだ。四十年も昔のことだから、もう時効にかかっていると思ったのか、それとも福森が新聞記者だから、ニュースソースは他言しないと安心して喋ったのだろうか。

福森は早々に長野医師宅を離れた。

ジャンボ旅客機で大阪空港に飛び、わが家へ帰宅した後も、ずっと福森は医者という言葉を反芻していた。

………  
精管切断………パイプカット

ト………子供は作れない………

福岡へ行かなければよかった、とまたしても思う。

二日間の取材旅行をこんなに長く感じたことは初めてであった。

「あなた、どうかなさったの、ぼんやりなさって。さつきから上の空の返事ばかり……お疲れのようだから、早くお休みになって下さい」

理恵の言葉にうながされ、福森は床にいたが眠れはしなかった。

大きく脹ふくらんだ妻の腹を見て、いよいよおれも父親になるのか、と思っても、おれの子供だろうか？と疑ったことはない。考えてみると女性は妊娠と同時にわが子と認識するが、男性は何をもってわが子と信じる

のだろうか。

週刊誌が書き立てる処女喪失の低年齢化、結婚時における非処女の高率が、もし本当ならば、そして結婚後も異性交渉を自由に続けていくとすれば、生まれてくる子の父親を果して断定できるのだろうか？。

信じて疑わないことはいいことであるが、盲目的な信頼は、時として愚鈍ぐどんに通じる。

しかし最初から自分の子でないことが分かっているながら結婚し、生まれた子を育て慈しむ行為は凡人にはできないことである。

中山中尉の場合、大西局長やその家族、局員、村人、すべてが毫ごうも疑っていないなかった。これは人徳じんとくの賜物たまものであろうが、中山中尉の細心の注意深さもある、と福森は思っ

た。

傷痍年金しょういねんきんを申し立てなかったことをはじめとし、R高やD大クラスメート、海軍の同期生等との接触を避けたのも、自分の身体欠陥を知っている者に出会うかもわからない、と思っただからではなからうか。

子供のために、どんな犠牲を払っても、秘すべきことは守り通したのである。

憶測たくまを逞たくましくすれば、釣りの季節はずれに、水に落ちてぶ濡れになったと言ったのは口実ではなかっただろうか。入水じゆすいした加代かよを救い、事情を聞いた後で決断したのもと思えて仕様がなかった。

だがすべてを胸に秘めたまま、中山夫妻は他界している。今となって口外すること  
は死者への冒瀆じんりんであり、人倫じんりんの道にもとる。

このことは忘れよう、と福森は決めた。

それにしても、戦争は残酷で非情極りないものである。それを熟知していながら、地球上に戦火の絶えたときがない。せめて日本だけは、いつまでも平和であって欲しい、と願わずにはおれない。

中山中尉は、爛熟らんじゆくした平和の世にあっても、終生、戦争の中に生きていたのではなからうか。生死を共に誓った部下たちを、自分の不注意から戦死させた悔くいは、生涯深い傷痕しょうこんとなって心に刻みこまれていたのではあるまいか。

それは右腕を失った不自由さや生殖機能の損傷とはくらべものにならないほどの重圧感で彼を責めたのであろう。

澤田兵曹さわだへいそうにしても、自分の気まぐれな行

動が中山機長なかやまきちようを傷つけ、戦友たちを南海の海に散華さんげさせたことに悩み、傷つき心身ともにぼろぼろになっていたのだろう。

二人とも戦後は余生だ、と言ったが、戦場の銃火の中よりも厳しかったに違いない。――ザ・ロング・アンドワインディングロード（長く険しい道）――。つぶやきながら福森は目を閉じた。

（了）